愛知の博物館　No.99

グスタフ・クリムト
《人生は戦いなり（黄金の騎士）》
1903 年
油彩・テンペラ・金箔、カンヴァス
100cm × 100 cm
愛知県美術館

本作は、日本の公立館が収蔵した初のクリムトの油彩作品で、愛知県美術館を代表する一点として広く親しまれてきた。クリムトの金を用いた装飾的なスタイルが顕著な時期を象徴する様式であり、色調の異なる 4 種の金箔を用いた複雑な石畳の表現には日本の金屏風における箔足からの影響が色濃く感じられる。本作が制作された 1903 年は、オーストリア教育文化省の依頼を受け発表したウィーン大学大講堂の天井装飾画案が教授陣から激しい抗議を受け、その余波で公的な援助が減じたクリムトの失意の時期でもあった。当時のドイツ語圏において、恐るべき道連れにも惑うことなく孤独に自らの道を進む騎士像として一般に広く普及していたアルブレヒト・デューラーの銅版画《騎士と死と悪魔》（1513 年）を下敷きに、画面外から侵入する蛇など独自のモティーフを加え、自らの立場を困難に立ち向かう騎士として表現することで、クリムトは本作において理想の実現への決意を新たにしている。

（副田一穂　愛知県美術館　学芸員）

目　　次

●第 38 回東海三県博物館研究交流会の報告 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
●平成 25 年度愛知県博物館等職員研修会の報告 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
●平成 25 年度部門別研修会の報告
保存・修復部門研修会 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5
調査・研究部門研修会 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7

第38回
東海三県博物館研究交流会の報告

平成25年9月12日の東海三県博物館研究交流会の状況を報告します。

本年の交流会は、来る平成26年4月19日に三重県立総合博物館が開館予定である事から、午前は建設中の同館（津市広明町147–2）の施設見学、午後は三重県立美術館（同 大谷町11）に場所を移して開催され、三県合計78名（内愛知県26名）が参加した。

〈内　容〉

・午前の部

あいさつ　10:50〜11:00

三重県博物館協会　理事　吉田悦之氏
三重県立博物館　　館長　布谷知夫氏

概要説明　11:00〜11:10

三重県立博物館　　技師　田畑　衡氏

２グループに分かれ館内視察　11:10〜11:55

・午後の部

あいさつ　13:30〜13:40

三重県博物館協会副会長　松月清郎氏

報　告　　13:40〜15:10

「神仏と博物館」

岐阜県博物館協会 会長
若 宮 修 古 館　館長　若宮多門氏

「愛知県博物館協会の事例」

愛知県博物館協会事務局
名古屋市科学館学芸係長　鈴木雅夫氏

「三重県博物館協会40周年記念事業
ワーキンググループの活動について」

皇學館大学研究開発推進センター
佐川記念神道博物館　学芸員　千枝大志氏

座談会「地域の博物館協会の意義」
15:20〜16:10

〈概　要〉

午前中の三重県立総合博物館は、建築工事が終了し引き渡しされ、展示工事・引越作業中の段階での視察となった。床から吹き出す空調や可動式壁など特別展会場の建築的工夫の説明があ

三重県立総合博物館展示室視察風景

った。また、博物館機能の一つとして重要な収蔵庫も、国指定文化財の寄託も想定して、地中熱を利用し、24時間温湿度管理の空調設備を設けている。さらに、庫内の素材には調湿材や地元の杉材を用いる工夫や、完成後は担当者以外は入室を制限するセキュリティ管理が徹底されるなどについて説明があり、今後、改築やリニューアルを迎える館園にとっては、大変参考になったと思われる。

次に、各県を代表する事例報告では、県内における神仏と地域の関わりを、博物館活動を通していかに学んでもらえるかという取り組みや、博物館協会が果たす、総会や研修会を通じた様々な分野で構成される加盟館相互の連携の意義、また、創立40周年記念事業の中で実施されるワーキンググループ活動についての発表がなされた。

午後の研究交流会では、東海三県が集まっていることの意義を、各県の代表者の発表を踏まえ会場全体からの意見を聞く座談会形式で行い、緩やかでかつ密接な情報交換や交流を今後も続けてい

くことの重要性を再認識する会となった。今年度、岐阜県で日本博物館協会の大会が開催されること、来年度は三重県で同大会が開催されることへの協力要請もあった。

（鈴木雅夫　名古屋市科学館 学芸係長
愛知県博物館協会事務局）

鳳来寺山自然科学博物館

平成 25 年度愛知県博物館等職員研修会
愛知県博物館協会 50 周年記念
「地域に根ざした博物館 50 年の歩み」

愛知県博物館協会では毎年、テーマを定めて職員研修を実施している。平成 25 年度の愛知県博物館等職員研修会は愛知県教育委員会との共催であり、愛知県博物館協会設立 50 周年の記念も兼ね、「地域に根ざした博物館 50 年の歩み」と題して 11 月 28 日（木）に実施された。地域に根ざした博物館活動は、多少の差こそあれ各館において共通するテーマである。本研修では、ちょうど 50 年前に鳳来寺山の麓に設立され、地域に支えられて活動を続けてきた鳳来寺山自然科学博物館を中心に、設楽原歴史資料館・長篠城址史跡保存館が研修会場となった。地理的な制約からなかなか訪れる機会の少ない奥三河・新城での開催とあって、参加者数は 36 人に上った。

はじめに、設楽原歴史資料館・長篠城址史跡保存館を訪ね、両館では館内・史跡の見学とともに、各館の地域との関わりについてお話しいただいた。いずれも地域との強い繋がりの上に設立された館であり、地域における博物館のあり方、地域との関わり方について学ぶべき点が多く見受けられた。その内容は以下の通りである。

●設楽原歴史資料館

案内：同館学芸員　湯浅大司氏

平成 8 年に旧新城市によって設立された設楽原歴史資料館は、その設立当初から地域との関わりがある。そもそも織田信長・徳川家康連合軍と武田勝頼が対峙し、激戦を繰り広げた「長篠の戦い」の一舞台となった設楽原について、地域住民の勉強会が発足し（現「設楽原をまもる会」）、その拠点を作りたいという要望から設立されたのが同館である。現在も①「設楽原をまもる会」を筆頭に、②岩瀬忠震に関する勉強

会である「忠震会」、③長篠・設楽原鉄砲隊、④その他として、地域住民の支援による、馬防柵の補修、火縄銃の手入れ、団体客の案内など、多岐にわたる活動に対し協力をいただいている。同館としても、潤滑な支援を受けられるよう配慮しており、相互の活動に参加するだけでなく、鉄砲隊への練習場の提供、地域の祭りに際する駐車場の開放なども実施し、共栄を図っている。

設楽原歴史資料館解説風景

●長篠城址史跡保存館

案内：同館館長　山内祥二氏

長篠城址史跡保存館は、長篠の戦いにまつわる資料を展示するべく、昭和 39 年、地元教員で長篠村長も務めた丸山彭氏を館長として旧鳳来町に設立された。設楽原歴史資料館設立の後、旧鳳来町が旧新城市と合併した際には、両施設の一本化も検討されたが、地域住民の長篠城址に対する強い思い入れや、相互の地理的な隔たりもあり、双方を維持できる対応が検討された。現在では、同館では長篠の戦いについて、設楽原歴史資料館では設楽原における戦いや各種の銃砲、そのほか新城市にまつわるテーマを複合的に展示して、より両館の性格の違いを明確にした運営がなされている。

長篠城址史跡保存館　長篠城本丸址解説風景

鳳来寺山自然科学博物館では、加藤館長から地域との関わりについてご講話いただいた。同館は山間の小さな博物館であるが、小中学校との連携や教育普及活動、友の会活動など、地域に根ざした博物館活動が盛んであり、地域とともに歩んでいる様子が強く感じられた。

●鳳来寺山自然科学博物館

案内・講演：同館館長　加藤 貞亨 氏

演題「鳳来寺山麓にある
小さな自然科学博物館の運営と実践」

鳳来寺山自然科学博物館は、国の名勝天然記念物「鳳来寺山」の麓に、鳳来寺山を中心とした地域の自然（地学、植物、動物）に関する展示と教育普及活動の拠点として、昭和 38 年に旧鳳来町が設立した。設立の目的は①人と自然の懸け橋となる博物館、②地域・社会に貢献する博物館、③みんなで創り育てる博物館であり、この設立目的を大切に守りながら実践している多様な活動について紹介があった。

同館の地域との関わりは深い。特に印象的であったのは友の会活動で、地域との繋がりが顕著に表れており、会員は地域住民を中心として現在 600 名を超え、およそ 3 分の 1 を地元の小学生が占めている。ボランティア活動も積極的

鳳来寺山自然科学博物館解説風景

に行われ、教育普及や資料整理、更には博物館の大掃除も協力を受けているとのことであった。こうした支援の獲得には、博物館側の努力やアイディアが重要な役割を果たしているとみられる。例えば友の会会員証には来館の際にスタンプを押し、すべて集めると表彰されるなど、子どもたちが喜びそうなシステムを取り入れている。また発行 26 年目を迎える手書きの「はくぶつかんだより」は、友の会会員をはじめ地域に配布されており、発行当初と変わらぬ温かさで博物館の活動を伝えている。教育普及活動においても、子ども向けの行事に大人の参加希望が多いことを考慮し、大人も参加できる形態に変更するなど、ニーズに即した対応をしている。

今回３館を訪問して、博物館側の柔軟で誠意ある工夫の積み重ねが、地域と一体となって歩んでいくための重要なポイントであることを改めて認識させられ、非常に意義ある研修会となった。　（安藤香織　徳川美術館 学芸員）

平成 25 年度 愛知県博物館協会〈保存・修復部門研修会〉

平成 26 年 2 月 5 日（水）、熱田神宮文化殿講堂において保存修復部門研修会を実施した。当日の参加者数は 47 名となり、講師として大阪市立美術館 館長 篠 雅廣氏、京都造形芸術大学教授　内田俊秀氏にご来臨を賜った。両講師からは、関東大震災をはじめ平成 7 年の阪神・淡路大震災、また同 23 年の東日本大震災など、明治以降これまでにわが国で発生した自然災害における文化財の被災状況をもとに、災害が発生した際、いかに対応するか、また災害発生以前からどのような心構え・予防をしておくべきかを、実際の経験をまじえて講演いただいた。

●「阪神淡路大震災に遭遇して
―なにをどうしたらよいのかわからなかった―」

講師：大阪市立美術館　館長　篠 雅廣氏

篠 雅廣氏（大阪市立美術館　館長）

はじめに篠館長より、上記の演題でご講話いただいた。講演開始直後、スクリーンに映り込んだ画像は、「まず結論を申します」の言葉と結論が提示され、続いて「私の反省」と書かれた画像と共に記されていた反省点は、

①「地震なんてくるはずがない」と思っていた
②「地震対策」など考えたことがなかった
③関心がないので、いかなる勉強もしなかった

というものであった。篠館長は阪神・淡路大震災発生時、震源地に近い兵庫県内の美術館に勤務しておられ、発生直後の市街地や事務所、展示室・収蔵庫の状況などの画像を掲示しながらお話しを頂戴した。

また、その後被災館を離れた同氏は、各勤務地の美術館の実例を挙げながら、いかに「ヒト」と「モノ」を護らなければならないか、館の立地条件と建造物のスペック、職員配置を踏まえた上、「耐震」・「免震」を論ずる前に、「減震」・「減災」の要を説かれた。

さらに信じたがために裏切られ、また私どもを見えない力で縛り付け、いざという時に動けない一因が「マニュアル」であるという言葉は、さまざまな館での重責を担われて来た同氏ならではの名言であった。一定環境下におけるマニュアルは私ども組織に属するものには心の拠り所ともなるが、緊急災害時にはそれが手かせ足かせとなり、目の前で起こっている事象に的確に対応できない。また、大丈夫だと信じて施した展示・収蔵の固定具が災害時は逆に負荷がかかり、「モノ」を傷める原因になってしまったことを実際の画像を見ながら学ばせていただいた。

そして公立館にはその施設を被災者の避難所として、また、それ以外の理由で提供せざるを得ない場合がある。そしてそれを誹謗中傷される事もある。惑わされず「人」として正しい事をする、それには「経験を生かす」こと、「“best choice”ではなく“better choice”」を念頭におくこと、それが、「モノ」や「ヒト」を護り、さらに被災した「モノ」も含めて博物館活動を行い、「ヒトの心」の回復の一助とする事も私どもの仕事の一つなのだと再認識させられた。

●「被災者が美術館・博物館に望むこと」

講師：京都造形芸術大学 教授 内田俊秀氏

続いて、内田教授より上記演題でご講話を受けた。はじめに阪神・淡路大震災発生からわずか３ヶ月後に神戸市内に支店を持つ地元銀行ロビーで行われた県立美術館主催の洋画展の様子が映し出された。震災発生３ヶ月後と言えば、未だ被災地の整地どころか、JR をはじめ各私鉄も復旧していない状況下にあった。その中、館蔵の比較的堅牢な油彩画を選択し、「～復興へ向けて・やすらぎ美術館～」と題した洋画の名作展を行う事によって、被災した人々のメンタル面での支援を博物館活動で支援しようとする

保存修復部門研修会会場風景

取り組みであった。

実は、阪神・淡路大震災の三四半世紀前、わが国では関東大震災が発生し、社寺・一般家屋の倒壊・火災で約 5,000 件、数万点に及ぶ美術工芸品が消失した。その折も文化財救出・保護・修復作業はなされて来たであろうが、阪神・淡路大震災の折の「文化財レスキュー（阪神・淡路大震災被災文化財等救援委員会）」活動ほど大規模な活動概念ではなかったであろう。

関東大震災から阪神・淡路大震災までの年月を待たず発生した、平成 17 年の新潟県中越地震、そして先般の東日本大震災において「文化財レスキュー隊」の活動がクローズ・アップされる事となった。

阪神・淡路大震災より、文化財レスキュー活動に携わってこられた内田教授は、いかに「モノ」を迅速に救出し適切な処置を施すことによって「モノ」のその後が左右されることの大切さを語られた。

また、文化財レスキュー事業も、家屋の倒壊が多かった阪神・淡路大震災と、文化財被害についてのみ述べると、津波被害が大半を占めた東日本大震災では文化財の罹災状況が全く異なり、前回の経験を十分に生かせなかったこともあったというお話しを伺った。

さらに「モノ」には「文化財」・「文化遺産」、加えて「日常品」・「思い出の品々」まで多岐に亘る。私ども文化財関係に従事する者は文化財の保護・保存を念頭に考えるが、一般被災者にとって大切なのは家族や自分の「命」であり、仕事道具であり、自分たち「家族」の思い出を伝える何気なくも大事な品々である。ただ、被災したモノすべてに手を差し伸べるのは難しいのも実情である。どこまでを救出し、どこからのモノに目を瞑るか…非常時の難しい局面を思い知らされることとなった。

地域を物語るモノを維持するためには「濡らさない」、「燃やさない」、「盗まれない」、「破片でも捨てない」などの応急処置・対応と、行政・各種 NPO 法人、そして地域住民等、日頃からのネットワークの必要性と拡充についてを学ぶ貴重な講演、研修会となった。

内田俊秀氏（京都造形芸術大学 教授）

平成 25 年度 愛知県博物館協会〈調査・研究部門研修会〉

調査研究部門研修会会場風景

平成 25 年度調査・研究部門研修会は、平成 26 年 2 月 25 日（火）、徳川美術館の講堂を会場に開催し、歴史・美術分野の学芸員を中心に、定員 40 名のところ、総勢 62 名の方々に参加をいただく盛況な研修会となった。

研修のテーマは、「寄託・寄贈品の受入について」とし、前半は銃砲刀剣類の登録などの諸手続きについてお話しいただき、刀剣の取り扱い・手入れを学んだ。後半は実際に体験されたエピソードをもとに寄贈や寄託を受ける際の注意点などについて各館の事例報告を受けた。

高橋康三氏（愛知県教育委員会生涯学習課 教育主事）

まず、愛知県教育委員会生涯学習課文化財保護室教育主事の高橋康三氏より「銃砲刀剣の登録と譲渡の手続きについて」と題し、ご講話を賜った。同氏は銃砲刀剣類の登録に関する業務を担当されていることから、今回、銃砲刀剣類の発見から新規登録等について一連の流れについてお話しいただく運びとなった。昭和 33 年に成立した「銃砲刀剣類等所持取締法」、所謂「銃刀法」に基づいて話しを進められ、未登録の銃砲刀剣類の発見から登録手続きに関する流れを説明いただき、その後、問い合わせが多い事例や注意を要する事例についてＱ＆Ａ形式で解説いただいた。同法成立後 50 年以上経つ現在においても、愛知県内では年間 500 点に及ぶ新規発見・登録（登録証の再交付も含む）がなされているとのことである。そして、登録手続き後の所有者の変更届けの例を挙げて、所有者自身が同法を把握していないことや、それに加え地方分権化が進むことによる職務の煩雑さなどのご労苦を伺った。また、公立館、私立館など、設置母体による違いはあるが、本来登録が難しい物件であっても、その保管・展示が認められる事例もあるとのことで、警察への事情説明・相談が重要であることを伺った。

次に、熱田神宮宝物館学芸員内田雅之氏より、「刀剣の扱いについて」と題するレクチャーを受けた。はじめに、スクリーンに映し出される画像を見ながら刀剣の鍛造工程や、基礎知識の説明があり、その後、取り扱いや手入れの仕方などの実務を見学した。参加者の中には刀剣を取り扱った経験のない方もいたため、真剣を用いた取り扱いは非常に新鮮に目に映ったように感じた。取り扱いは他の美術工芸品以上に繊細で、自ら或いは周囲へ対して常に緊張感を持つこと、また、刀剣を傷つけないよう、気遣いを持って丁寧な作業をすることが必要だと学んだ。

内田雅之氏（熱田神宮宝物館　学芸員）

休憩を挟んで行われた後半の事例発表では、はじめに、岡崎市美術博物館副館長の荒井信貴氏より、「寄贈寄託あれこれ」と題し、寄贈・寄託の際に留意すべき点について、ご自身の体験談をもとにお話しいただいた。普段文化財という「モノ」と対峙することの多いわれわれであるが、資料の寄贈・寄託は「人」対「人」の交渉であり、コミュニケーション能力が必要とされること、相手の心情を読み取り、所蔵者が進んで寄贈（寄託）する気持ちになれるよう、会話の駆け引きが重要だとのお話しは、長年館務を勤しんでこられた荒井副館長ならではの言葉であった。また、日頃からの情報収集も重要で、情報を得たら迅速に行動することが散逸防止につながるとアドバイスを頂戴した。

荒井信貴氏（岡崎市美術博物館　副館長）

次に、前出の内田雅之氏が「熱田神宮の献納品受入れ体制とその後・・・」と題し、事例報告を行った。同館では寄贈を受けることを「献納」と称し、寄贈という言葉は使用しないとのことである。宝物館の設置母体は宗教法人で、神社への献納であるため、他館とは少し事情が異なるものの、献納品を展示する際や、四季を

内田雅之氏（前出）

通して執り行われる神事に際して献納者へ神事参列の案内を行うなど、アフター・フォローが大切という話しを聞いた。献納を受けた美術工芸品は国民の宝である前に御祭神に捧げられた宝物であるという認識があり、献納品の丁寧な扱い、また、上記の献納者の心情への配慮が、更なる献納を生み出すということで、他館でもすぐに取り組むことができるように感じた。

最後に、愛知県陶磁美術館主任学芸員の田村哲氏より「陶磁資料館 35 年のコレクションと陶磁美術館としてのこれから」と題したお話しを頂いた。同館は昨年６月に館の名称がこれまでの「陶磁資料館」から「陶磁美術館」に変更され、それに伴い資料収集事項の優先順位なども改められたという。収集する資料が増え続けることは他館でも持つ悩みだと思われるが、館としての資料収集方針が明確に示されていること、資料委員による資料委員会での承認を経て受け入れの決定がなされていということが印象的であった。また、展示内容を評価され、資料の寄贈に結びつくこともあるとのことで、個人所蔵者が愛蔵品を寄贈する気持ちになるような展示を日頃より行うことの必要性を強く感じた。

田村 哲氏（愛知県陶磁美術館　主任学芸員）

今回の研修会は、前後半の講話・事例報告ともに実践に即している点で非常に有意義なものとなった。特に刀剣の取り扱いについては、まとまった資料数がなければ展示もできず、なかなか取り扱う機会に乏しいため、知識はあったとしてもいざ実践という際には戸惑うことも多いのではないだろうか。学芸員としての基本的な技術を習得し向上させるため、定期的にこのような機会が設けられればと感じた。

最後に、本研修会を開催するにあたり快く講演依頼を引き受けて頂いた講師の皆様、会場の提供を賜った徳川美術館、そして参加者の皆様へお礼を申上げる次第である。

（服部一宏　弥富市歴史民俗資料館　学芸員）

編集後記　～実行委員会の現場から～

私ども、愛知県博物館協会の実行委員は、会長館をはじめ、副会長館、理事館・幹事館に勤務する学芸員 17 名と、会長館の事務職員さんで成り立っています。凡そ月に 1 度会合を開き、職員研修会や部門別研修会のテーマや内容を話し合ったり、「おでかけガイド」や本紙の作成など、それぞれが担当を持ち、その運営に取り組んでいます。

この度、職員研修会と保存修復研修会実施に際し、アンケートを取らせて頂きました。双方の研修会ともに参加者の皆さまには満足いただける内容だったようです。特に職員研修会で訪れた、3 館の地域と共に歩んできた取り組みに対する賞賛のコメントは多く、災害対策・被災後の対処などにも高い関心を示していただけました。また、今後取り上げて欲しい研修テーマや見学場所などについても様々なご意見を頂戴しました。皆さまから頂戴したご意見・ご要望は、貴重な「生の声」として、決して無駄にすることなく協会活動の発展に反映させていただきたいと思います。今後とも当協会の諸事業に対しまして、ご理解・ご協力を賜りますよう、また、さまざまな「声」をお聞かせ下さいますよう、お願い申し上げます。

(編集・文責　内田 雅之　熱田神宮宝物館学芸員)

「愛知の博物館」No.99

発　行　日　平成 26 年 3 月 31 日

編集・発行　愛知県博物館協会

〒460-0008
名古屋市中区栄二丁目 17 番の 1
名古屋市科学館内
TEL〈052〉201-4486　　FAX〈052〉203-0788